

◆各常任委員会では、先進自治体の事例を学ぶため、行政視察を行っています。

### 経済建設常任委員会

視察先：兵庫県西宮市・丹波篠山市  
期 間：令和5年10月23日～25日



#### 【西宮市：スポーツを核とした甲子園地域の活性化事業について】

西宮市では令和元年10月からスポーツを核とした甲子園エリア活性化推進協議会を発足し、年間を通じてスポーツやアウトドアを楽しめる環境の創出に官民連携して取り組んでいる。また、プロ野球や夏の甲子園大会シーズンオフ時の甲子園球場の活用にも力を入れている。以上の2点について学ぶため視察を行った。

まず、担当者より協議会の事業として

- ①各種PR媒体を活用した情報発信
- ②賑わい創出イベントの実施
- ③プラットフォーム事業の展開

といった3つの事業があり、西宮市・阪神電気鉄道株式会社・三井不動産株式会社・武庫川女子大学等が構成員となっているとの説明があった。

甲子園球場のシーズンオフ時の活用方法については、西宮市内の小学6年生や中学生が甲子園球場に集合して行われる体育大会や、前述の協議会が開催するキッズイベントなど、数多く活用されていると説明があった。

◎本市では貴重な観光資源として2つの遺跡があるが、冬期間に遺跡が雪で覆われてしまうため通年で活用できる方法を今回の視察を通じて考えていきたい。



担当者の説明を聴く委員

#### 【丹波篠山市：黒豆サポーター職員制度について・移住者の黒豆農家訪問】



丹波篠山市役所にて

- ・「黒豆サポーター職員制度」について

丹波篠山市では令和4年度から「黒豆サポーター職員制度」を開始している。この制度では、特産物の収穫等担い手不足解消並びに、今後の農業振興の向上を図ることを目的としているとの説明を受けた。

まず、担当者より制度導入の背景として、市職員の副業についての一般質問があり、先進地事例の調査を実施したことがあげられると説明があった。次に、制度を利用した職員の人数や内訳、従事先の内容についても詳細な説明があった。

- ・移住者の黒豆農家を訪問

神戸市から丹波篠山市へ移住し、黒豆農家を営んでいる「ONE BEANS」の村上さんを訪問した。

村上さんからは黒豆農家が減少しているため、若手の農家である自分が頑張って、この地区の黒豆農家を盛り立てていきたいとお話を伺った。また、自分のように農家に転職する際に、行政から支援を受けられて助かったこと、もっと支援を充実することで、農家が魅力ある職業であると認知されることを願っていた。



村上さんへ質問する委員

◎本市でも農家の担い手不足の解消は喫緊の課題であり、今回の視察を通じて課題解決の方法の1つとして認識し、今後も農家の担い手不足解消を進めていきたい。

◆各常任委員会では、先進自治体の事例を学ぶため、行政視察を行っています。

### 総務常任委員会

視察先：愛知県豊田市、岐阜県郡上市  
期 間：令和5年11月8日～10日



#### 【豊田市：低炭素モデル地区について】



「とよたecoful town」で説明を聴く委員

豊田市は、全国有数の製造品出荷額を誇る「クルマのまち」「ものづくりのまち」として知られている。2018年6月、内閣府より持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けた取組を先導的に進めていく自治体「SDGs未来都市」にも選定され、2023年には「全国市区第3回SDGs先進度調査」で全国総合2位を獲得。市民、地域、企業、先進技術、自然などさまざまなものがつながり、それぞれの魅力を活かし合って豊かなまちをつくる「豊かな暮らし」を目指している。10年先、50年先を見据えた取り組み、その事例を体感できる施設「とよたecoful town」を視察。IT（情報技術）の活用により創エネ機器（太陽光発電など）や蓄エネ機器（蓄電池など）、省エネ機器（省エネ家電など）をコントロールし、エネルギー

マネジメントを行うことで、家庭内のエネルギー利用を最適化する、かしこい住宅「スマートハウス」や、燃料電池自動車（FCV）に必要な「水素ステーション」など、施設内の特殊設備の見学や水素製造の過程、FCVなどについて学ぶことができた。

今後の課題について・・・「とよたecoful town」は、低炭素な暮らしを目指す施設として作られたが、今は脱炭素の時代。これから、どうやって皆様に脱炭素にトライしてもらえるか企業と連携しながらいろいろ試行錯誤していく。

◎本市では2050年「ゼロカーボンシティ」を宣言しており、再生可能エネルギーの活用を推進、二酸化炭素排出削減を図ることとしている。今回の視察で得られた成果を参考にし達成できるよう提言していきたい。

#### 【郡上市：空き家等対策について】

郡上市は空き家等の活用促進による地域活性化を目的として「郡上市空き家等対策計画」を策定。空き家等を有効活用した移住・定住促進及び起業への支援策を展開している。

空き家再生に特化したプロジェクトチーム「チームまちや」が結成され、空き家所有者から建物を直接借り、水回り（お風呂・トイレなど）や老朽箇所等を改修、居住可能な状態にした上で、郡上八幡に住みたい方や新規開業したい方へ貸し出している。

空き家再生に必要な費用（改修費、維持修繕費など）は郡上市と郡上八幡産業振興公社の共同出資による「空き家活用基金」を充当し、その費用は所有者から建物を借りる10年間で、入居者から頂く賃貸と所有者へ支払う借賃の差額収益により回収している。町中の空き家を一挙に内覧できるツアーを年に3回開催しており、大変好評だとのこと。また、移住を検討している方のみを対象として、「お試し町家」という、家具や電化製品一式が備え付けてある物件を1ヶ月から3ヶ月の期間で借りることが可能。

今後の課題について・・・高齢者世帯の増加等に伴い人口減少が進行していることや、産業構造の変化による次世代の人口流出等により、空き家が増加傾向にある。今後も利活用が進まなければますます増加する。借りたい人を探すのが一番大変なので、イベントなどを開催し、若い人達を集め、きっかけづくりをしようと思う。

◎本市でも空き家等対策を実施し、空き家等データベース化、相談窓口を設置しているが、空き家は増加傾向にある。「チームまちや」での取組を本市で生かせるよう、空き家を活用した移住・定住対策の取組、そして地域活性化を図る事業を進めていきたい。



「チームまちや」の説明を聴く委員

◆各常任委員会では、先進自治体の事例を学ぶため、行政視察を行っています。

### 教育民生常任委員会

視察先：大阪府高槻市、箕面市  
期 間：令和5年11月20日～22日



#### 【高槻市：給食費無償化について】

高槻市は、新型コロナに係る地方創生臨時給付金を活用し、令和3年から時限的に小中学校の給食費無償化を開始した。令和4年には中学校の給食費を恒久的に無償化し、小学校においても令和5年から同様に恒久的な無償化となった。同時期に給食費の公会計化も行われ、徴収の手間が省けたうえ、分かりやすい支援策として保護者からは好評を博している。給食の提供内容に無償化を理由とした変更はなく、食物アレルギーの除去食や行事食にも力を入れているとのこと。献立に児童生徒から募ったアイデアを取り入れたり、複数のデザートから自分の好きなものを選ぶ「デザートセレクト」を行うなど、給食を通して子どもたちの成長を支えている。



高槻市役所にて

**財源の確保について**・・・高槻市では比較的財政が健全なうちから、精力的に歳入歳出改革、公営企業・外郭団体改革に取り組んできた。歳入面ではゴミ焼却エネルギーによる電力売却やふるさと納税など、歳出面では街路灯のLED化や公園の民営化などに取り組んでいる。このような行財政運営を進めていく中で、給食費無償化は財政的に持続可能であると判断し、恒久的な無償化に至った。

**今後の課題について**・・・食物アレルギー等で給食を全く食べることができない児童生徒（完全弁当は全体で10～20名程）は無償化の恩恵が受けられないため、検討課題である。

◎本市では様々な子育て支援事業を行っているが、財政面の課題から給食費無償化には至っていない。今回の視察で得られた知見を、本市における更なる支援拡充の参考にしていきたい。

#### 【箕面市：英語教育について】



箕面市の説明を聴く委員

箕面市は「世界で活躍できる子どもを育てる」「臆せず英語でコミュニケーションがとれる」を目標として、学習指導要領における教科化以前から英語教育に力を入れている。小中学校において毎日英語の授業があるほか、保・幼稚園に対しても公立私立問わずにALT（外国語指導助手）の派遣を行っている。また、市内の子ども約1万2500人に対しALTを76人配置し、知識だけではなく実際に英語を使ったコミュニケーションを重視した授業が行われている。英語を使って自分の想いを発表する「イングリッシュエクスプレッションコンテスト」や、ALTによる模擬的な英語の町をつくり、普段学んだ英語を実

際に使う「イングリッシュタウン」など、独自の行事も行われている。このような取組の結果、英語が楽しいと感じる小学生の割合が8割を超えることや、英検3級以上相当の英語力を有する生徒（中学3年生）が8割にのぼる（全国平均4割）など、非常に良好な結果を出している。

**子どもや保護者の声**・・・私立学校並みの英語教育が受けられると保護者から好評である。子どもたちも楽しく英語を学んでおり、英語力が活かせる大学に進学したり、就職後も英語が役に立っているとの声がある。

**今後の課題について**・・・現在の英語教育体制を維持していくこと。また、英語を楽しみと思う子どもの割合が、学年が上がり難易度が増すとともに減少していくので、現在は小学校のみで行われているイングリッシュタウンのような楽しみながら学べる機会を中学校でも増やしたい。

◎本市には4人のALTが配置されているが、授業における言語活動があまり行われておらず、ALTを活かしきれていない学校もある。箕面市での取組をもとに、本市でも活かせる部分があるか検討・提言し、これからの英語教育発展に期待したい。